

2025年12月14日降臨節第3主日

イザヤ書35章1－10節

ヤコブの手紙5章7－10節

マタイによる福音書11章2－11節

アドベント・キャンドルの3本目が灯されました。本日は礼拝後にクリスマスファミリーコンサートもあります。いよいよ2025年のクリスマスが近づいています。

アドベントの時期は、旧約聖書はイザヤ書、福音書はバプテスマのヨハネの物語から学びます。イザヤ書から学ぶのは、その数々の預言の中に、まことの平和を指し示す文言があるからです。そして、その点に注目するのは、イエス様がまことの平和を示す歩みをなされたからです。結論を先取りするならば、イエス様の誕生を祝うこと、すなわちクリスマスを祝うことは、まことの平和が実現する希望を祝うことに他なりません。

バプテスマのヨハネは、イエス様の宣教活動に先立って歩んだ方でした。彼は、四つの福音書すべてに登場します。歴史的な実像は明確ではありませんが、教会は、彼の歩みがイエス様の登場を予期し、またその備えをする役割を担ったと受け止めました。それゆえに、イエス様の誕生を祝う準備をするアドベントの期間に、彼の物語から学ぶことが大切なのです。

本日の福音書の物語は、「さて、ヨハネは牢の中でキリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた」（マタイ 11:2-3）から始まります。そこでは登場人物の感情描写などは一切なく、淡々と出来事が語られています。主なる神様の義のために働き、悔い改めを述べ伝えたバプテスマのヨハネは、ガリラヤの領主ヘロデ（アンティパス）によって、捕らえられていたのです。そのこと自体は、マタイ福音書では4章12節に「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた」と、イエス様の活動との関連で触れられていました。また、本日の箇所少し後の14章1から12節で、そのヨハネの最後について、ヘロデ王がイエス様を洗礼者ヨハネだと勘違いした際の、回顧の場面で触れられています。本日の場面のヨハネは、主なる神様のために正しい行いをしていたにもかかわらず、投獄され未来が全く不明ななかにいるのでした。

そのような状態のヨハネにもイエス様の活動のうわさが響き、彼は自分の弟子を遣わして、「来るべき方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか」（マタイ 11:3）と尋ねます。この内容から彼が何のために活動していたのかが明確になります。それは本当の救い主の登場を待ち望んで、そのために道を備え続けてきたということです。言い方を変えれば、自分は主人公ではなく、その登場までの引き立て役であると自覚していたということです。そして、その役割すら達成できたのか否かも不明のまま、死を迎えようとしていたのです。

そのようなバプテスマのヨハネの質問に対して、イエス様は明確には答えていません。「わたしが、その人です」とは答えないのです。そのかわり、『聖書（旧約）』の言葉を語ることを通して答えます。本日の旧約日課である「イ

ザヤ書」35章の言葉を中心にして答えるのです。

物語は、「ヨハネの弟子たちが帰るとき、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた」(マタイ 11:7)と、イエス様の教えに移行します。ヨハネの反応は一切書かれていません。それは読者の想像に任せている、あるいは福音書の関心事ではないということかもしれません。しかし、本日のイエス様の教えの最後、「よく言っておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である」(マタイ 11:10)という言葉が、バプテスマのヨハネについて、人間に対する最大の評価をしていることがわかります。天上にいる天使でもない地上の人間に過ぎないヨハネですが、この地上においてはもっとも偉大であるということです。それは間接的にモーセを代表とするあらゆる預言者よりも偉大であると言っていることにもなります。しかし、彼自身が待ち望んでいた、天上の御子であるイエス様とは比べ物にならないことを告げているのです。

本日の福音書に描かれているバプテスマのヨハネとイエス様のやりとり、その物語が示すこととは、洗礼者ヨハネの活動が、『聖書(旧約)』の預言者の言葉を通じて示された、主なる神様の意志に基づいているということです。ヨハネが自分の考えで行ったことであるとか、その時代の思想的傾向に基づいてではないということです。それは、主なる神様の愛をその活動を通して福音として伝えるイエス様も同じです。だからこそ、イエス様は、「来るべき方は？」と聞かれて、直接私ですとは答えずに、イザヤ書の預言を語ることを通して答えたのです。そして、そうであるからこそ、時代を超えて大切な事柄を示すのです。

もし、バプテスマのヨハネが自分の考えや世間の思想の流れに基づいて活動し、自分の目標を定めて、その途中に投獄されていたのであれば、イエス様の答えに失望したでしょう。明確な答えをもらっていないからです。しかし、彼は、『聖書(旧約)』に基づいて、主なる神様の正義の実現を求めています。それゆえに、イエス様の答えが『聖書(旧約)』に基づくものであったからこそ、自分の今の状態を受け入れられたのです。そして、未来に希望を持ったのだと思います。自分の思い、人間の思いではなく、神様の意思が働いていることが確認できたからです。

2025年ももうすぐ終わろうとしています。世界はまだまだ平和ではありません。世界各地で争いがあります。しかし、イエス様は二千年前、そのような状況でお生まれになり、その活動からまことの平和の希望を示しました。今年もわたしたちはクリスマスを通してそのことを確認します。それはイエス様を信じる限り、この世界に希望が無くならないことの確認です。クリスマスとは本来、その言葉の意味としてキリスト礼拝である、だからイエス・キリストを通して主なる神様を信じるすべての礼拝が、クリスマスであるといわれることもあります。その意味では、いつでもどこでも礼拝が行われる時、わたしたちはまことの希望が生まれたことを確認し、望みを持ち続けることができるのです。今年も、その礼拝のもっとも大きな規模のものを、世界中で祝います。わたしたちもわたしたちに与えられた場所で、よりたくさんの人とその礼拝を捧げたいと思います。